

会長の任期を終えて

村上洋一 (KEK 物構研 PF)

恒例により本記事を依頼されましたので、会長任期中(2013年10月から2015年9月)の出来事を振り返ってみることにします。放射光学会長として十分な働きができたかどうか、はなはだ自信がありませんが、本稿では率直に、何をやろうとして、何ができて何ができなかったかを述べることにします。また、縁あってご助力を頂いた多くの方々へ、心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。

学会長として初めての評議員会(丁度100回目にあたる)のことでした)では、所信表明として次の3つの活動方針を述べさせて頂きました: 1. 放射光科学将来計画の推進, 2. 開かれた放射光学会への取り組み, 3. グローバル人材の育成です。

まず1番目の将来計画の推進に関しては、高輝度中型放射光源計画の実現と、長期将来計画の策定が大きな課題でした。評議員会では、各施設や各大学などの将来計画に対して、どこまで放射光学会がコミットするべきか、すべきでないかという真剣な議論が行われました。議論の末、高輝度中型放射光源計画の実現に向けた具体的検討を行うことを目的に、水木前学会長を委員長として「高輝度中型放射光源計画委員会」を設置することになりました。本委員会では、放射光学会員以外の委員(産業界も含む)が半数程度選出され、大所高所から幅広い議論をして頂きました。ここでの議論を基に、日本学術会議に公開シンポジウム開催の要請を行い、「中型高輝度放射光源に期待するこれからの科学技術」と題したシンポジウムが実現しました。また本委員会でも議論された内容は、文科省で開催された「次世代放射光ワーキンググループ」で、水木委員長から報告されました。一方、長期将来計画の策定に向けて先端光源に関する研究会を、分子研との共同主催で開催することができました。本研究会では、将来の放射光源として可能性のあるものについて、日本から独自の提案を行うことができるような議論をするということを目的としました。その結果、「第三世代放射光リング/SASE-FELを越えて—日本が選択すべき放射光源ロードマップに向けて—」と題して、将来光源の可能性を活発に議論することができたと考えています。直近の計画実現への努力と共に、長期計画への取り組みも、学会としては是非続けていきたいと思っています。

次に2番目の開かれた放射光学会への取り組みとしては、他学会や産業界と連携して放射光科学の発展を図るこ

とが課題でした。まずは放射光学会と関連の深い中性子科学会との連携を強めることを考え、基礎講習会などを互いに共催することから始めました。残念ながら、学会の産業界との具体的な連携は進めることができませんでした。また、放射光科学の健全な発展を図ると共に、将来計画に関して適切なアドバイスを行うサイエンスボードの設置提案をさせて頂きました。これに関しては様々な御意見を頂きましたが、結果的には議論をうまく纏めることができず、実現への道を踏み出すことが出来なかったことは、全く私の力不足によるものでした。

最後に3番目のグローバル人材の育成に関しては、これまでの学会の方針を引き継ぎました。基礎講習会として、他分野や産業界の方々も参加しやすいように「初心者のための放射光入門講座」を開催しました。講師として非常に熱心に講義をして頂きました先生方に深く感謝します。また放射光学会奨励賞では、優れた研究成果を挙げられた将来有望な若手研究者を表彰できたと思います。グローバルという観点からは、海外の放射光施設などと連携して、新しい学生・若手研究者育成プログラムを策定できれば良いと考えていましたが、これは計画提案までもいきませんでした。

その他、前学会執行部より引き継いだことですが、功労報賞をスタートできたことは嬉しいことでした。放射光利用研究に対して技術や支援業務を通じて長年にわたり大きな功績のあった方々に、本賞を貰って頂けたことは本当に良かったと思っています。一方、大変ショックだったことは、学会事務局の業務をお願いしています(株)ワーズさんが、業務の終了を数年後に予定しているとの連絡を受けたことです。その後、幹事会を中心に学会事務局業務をシームレスに移行するための作業を行ってきました。放射光学会発足当時より、西野三和子さんと佐藤亜己奈さんをはじめとするワーズの皆様には、ひとかたならぬお世話になりました。多くの放射光学会員の方々も同じ思いだと思います。これまでのご尽力に対し、深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、至らない点が多々あった私を全面的に支えて頂きました、庶務幹事の足立伸一さん、渉外幹事の濱広幸さん、会計幹事の木下豊彦さん、行事幹事の篠原佑也さん、編集幹事の木村昭夫さん、本当に有難うございました。また、評議員の先生方、全学会員の皆様にも、この場を借りて御礼を申し上げます。

2015年度幹事報告

庶務幹事を終えて

足立伸一（高エネルギー加速器研究機構）

前任の高輝度光科学センター・木村洋昭氏から庶務幹事を引継いでから、今年9月末で2年となり、無事任期を終える事ができました。任期中は様々なことがありましたが、なんとか任期を全うすることができましたのは、ひとえに、会長、幹事、事務局の皆様や、様々な励まし、ご指導、ご鞭撻をいただいた学会の先生方のおかげと心より感謝いたしております。

任期後半の最初の大きなイベントとして、2014年10月31日に日本学術会議主催の公開シンポジウム「中型高輝度放射光源に期待するこれからの科学技術」が開催され、日本放射光学会は共催団体としてシンポジウムの運営に参画しました。この公開シンポジウムは、ご存知の通り、日本学術会議科学者委員会・学術の大型研究計画検討分科会による日本学術会議マスタープラン2014で、当学会が提案した「新しい時代の科学技術立国を支える放射光科学の高輝度光源計画」が重点大型研究計画の27件に選出されたことを踏まえて、放射光分野の大型研究計画の重要性を学術界、政府、一般社会全体に対して広く訴え、計画実現に向けた建設的・集中的な議論を進めることを目的として開催されたものです。発起人の岩澤康裕先生（電通大）をはじめとする日本学術会議の先生方の企画立案に従って、学会幹事会・事務局を中心にポスター作成、各種関連団体への告知等の準備を進め、無事10月31日の開催に漕ぎ着けました。当日は122名もの参加者があり、その詳細は、日本学術会議「学術の動向」2015年5月号の特集として掲載され、また日本放射光学会誌28巻1号でも報告させていただきましたので、ぜひご一読いただければ幸いです。

また当学会初の試みとして、2014年11月21、22日の2

日間に渡り、「先端放射光源に関する研究会」を自然科学研究機構（愛知県岡崎市）にて開催しました。この研究会は、学会が主体となって第三世代リング型光源やX線自由電子レーザーの次に来るべき光源技術を概観し、今後の次世代光源開発へ向けた議論の基礎とすることを目的としています。研究会では回折限界蓄積リング、レーザープラズマ加速などの新しい粒子加速技術、エネルギー回収型ライナック、X線自由電子レーザーなどについて第一線の先生方にご講演いただき、その特長や性能、開発の現状と今後の課題について活発な議論が行われました。このような研究会を通じて学会内での議論を進め、学会の将来像への共通認識を持つことはたいへん重要であると改めて強く感じました。なお、この研究会の企画立案・開催にあたっては、分子研 UVSOR の加藤政博先生に多大なるご尽力をいただきました。この場をお借りして、深くお礼申し上げます。

任期前半に引き続き、後半の1年でも大きな取組み課題となったのは、学会設立当初から事務局をご担当いただいている(有)ワーズからの事務局移行に関する案件です。(有)ワーズは今後数年を目処に会社業務を終了することを予定されており、これを受けて、今後の学会事務局の運営体制を抜本的に見直しています。これまでに、次期事務局候補となる会社の仕様書策定、見積提出依頼、各社との個別面談を経て、現在最終候補を絞り込みつつあるところです。この重要案件は現在もまだ継続中ですので、新庶務幹事の藤原明比古先生（関西学院大）と緊密に協力しつつ、事務局移行の目処が立つまでは、微力ながら引き続き尽力させていただきます。

行事幹事を終えて

篠原佑也（東京大学大学院新領域創成科学研究科）

2年間、日本放射光学会の行事幹事をつとめました。改めて思い返してみても私のような若輩者に学会の幹事のお声がかかるとは思ってもおらず、とは言え、ひとまず引き受けてみて色々ご指導をいただくのもそれはいい経験になるだとも考えて拝命しました。過去に行事幹事をつ

とめられた先生方や事情をよくご存知の先生方からは「行事幹事は大変だよ」と言われ、実際に行事の運営を始めて以降、評議員会や総会などでさらっと報告される行事の裏側には多くの作業が必要なのだと具体的に認識し、これまで学会行事の企画、運営をされてきた諸先生方や、実際に

は大半の作業をお任せしてしまっている事務局に改めて感謝するとともに、貴重な経験を積む機会を下さった村上会長はじめ関係各位に感謝申し上げる次第です。

この1年間の主要な行事として、第28回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム（JSR2015）、第8回若手研究会、第7回放射光基礎講習会が開催されました。

年会・合同シンポは立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催されました。行事幹事としてはその前年のJSR14から関わっておりますが、年会開催時期の都合により、組織委員長としてはこの年会・合同シンポからとなります。経験豊かでフットワークの軽い太田俊明実行委員長、難波秀利実行副委員長、稲田康宏プログラム委員長のご尽力により、参加者は634名、企業展示も57社と大盛況のうちに終わることができました。あらためて実行委員会、組織委員会、プログラム委員会の皆様には感謝申し上げます。

基礎講習会、若手研究会はともに2009年度から始まっ

た行事で、今年度はともに9月に開催いたしました。今号に報告記事が掲載されておりますので、詳細はそちらをご覧くださいになっていただければと思いますが、開催にあたっては阿部仁（KEK）、高橋幸生（大阪大）、長坂将成（分子研）、松原伸一（JASRI）、矢代航（東北大）、山本達（東大）の各行事委員にご尽力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

年明け1月には第29回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム（JSR2016）が、千葉県の柏の葉キャンパスで開催されます。経験豊かな辛埴実行委員長、松田巖実行副委員長、藤森淳プログラム委員長、有馬孝尚プログラム副委員長にご支援いただき、順調に準備が進んでおります。会員の皆様におかれましても是非とも参加いただき、JSR2016を盛り上げて頂ければと思います。

最後になりますが、経験不足の私を様々な形で助けて頂いた会長、幹事の皆様、いろいろお願いにも迅速に応えて頂いた事務局の佐藤様に感謝申し上げます。

編集幹事を終えて

木村昭夫（広島大学）

編集幹事を終えるにあたって、2013年10月からの2年間の総括をさせていただきたいと思います。玉作賢治前編集幹事より引き継いでスタートさせたわけですが、それまでの大きな問題であった編集経費削減のための学会誌の2色化がすでに決定した状況でしたので、比較的楽に始めさせていただいたと思います。

日本放射光学会は、物理、化学、生物、地学などの基礎科学から環境、社会科学、産業利用まで大変広い分野の研究者、学生等から成り立っております。同じ放射光を用いて研究をしても必ずしも会員の間で意思疎通がスムーズにできるとは限りません。その中で、少しでも他分野の研究等について知る機会を持てる会誌の役割は大きいと思います。そのため編集活動方針としては「分野のトピックスについてバランスよく、また他の分野の会員にも分かりやすく研究内容を伝え、放射光科学の発展に貢献する」ことを目的にかかげて進めて参りました。

特に思い出に残ることとしましては、2014年の世界結晶年を記念した特集号を組んだことです。結晶を対象にしますから、やはり放射光を用いた構造解析の分野が中心となりますが、あいにく私は専門からは少し遠い存在でしたので、専門の近い数名の編集委員を含めてワーキンググ

ループを組みました。そのメンバーの方々が活躍してくださり、編集作業も比較的スムーズに進んだと思います。大変充実した執筆陣にも恵まれ2014年11月末発行の会誌に無事掲載されました。

また「試料環境シリーズ」が2015年9月末発行の会誌より掲載が、私の任期の終盤になって開始されました。当初予定されていた連載という形はとれませんでした。1テーマごと2号分は連続して掲載することでメンバーの合意が得られました。一方、シリーズ担当の方々の努力は並々ならぬものがありました。上記の編集方針のもと、初学者にも伝わりやすいように、シリーズ担当委員と執筆者の間で何度もやりとりを重ねて、ようやく出来上がった原稿はとても充実したものになっております。ここにシリーズ担当者の方々、執筆者の方々に敬意を表したいと思います。

最後になりましたが、大学業務や研究活動を行う中での編集作業は大変ではあり、不手際も多々ございましたが、事務局の佐藤様には綿密な事務作業等ご多大なるご尽力をいただきました。ここに感謝いたします。今年10月より吾郷日出夫氏のもとスタートした新体制にエールを送りつつ、ご活躍を楽しみにしております。

渉外幹事を終えて

濱 広幸 (東北大学)

この1年の渉外幹事の活動について振り返ります。

2014年の世界結晶年に続き、2015年は国際光年 International Year of Light and Light-based Technologies (IYL 2015) に制定されました。国内での国際光年の取組は、日本学術会議のICO (International Commission for Optics: 国際光学委員会) 分科会が中心となって活動が行われ、放射光学会でも以下に示す通り、国際光年を盛り上げる様々な活動に取り組みました。

- ・「国際光年に関する懇談会」(日本学術会議総合工学委員会 ICO 分科会拡大会議)に参加(2015年1月8日・日本学術会議)
- ・国際光年記念シンポジウム出席(2015年4月21日・東大安田講堂)
- ・国際光年協議会の会員として登録(国際光年 HP の協議会のページに団体名掲載)
- ・国際光年推進パートナーのシルバーパートナーとして登

録(国際光年 HP トップページに学会のロゴ掲載。日本学術会議主催の国際光年イベントへ優先的に参加)

- ・学会 HP トップページおよび学会誌「放射光」の表紙に国際光年のロゴを1年間掲示
- ・学会・関連施設による国際光年関連イベントの実施、協賛など

また、国際光年を締め括るイベントとして、12月11日(金)に東大安田講堂において「国際光年総括シンポジウム～光の科学と技術の新たな飛翔に向けて～」が開催予定です。ご興味のある方は、ぜひご参加ください。

国内外の関連団体との連携については、アジア・オセアニア放射光フォーラム(AOFSRR)を通じた近隣各国の放射光コミュニティとの連携、SPRING-8で開催されているケイロンスクールの開催支援を引き続き進めており、また国内の他学協会と連携した各種イベント・講習会等の共催、協賛を積極的に行いました。

会計幹事を終えて

木下豊彦 ((公財)高輝度光科学研究センター)

村上会長の下、会計幹事を仰せつかって2年間、いろいろな経験をさせていただきました。14年ほど前に庶務幹事を務めていた時とは周りの環境も変わり、学会の活動も世の中の動きに合わせて変わってきているのを感じながらの2年間でした。

この間、会長、その他幹事の皆様、評議員会の先生方、事務局のワーズの西野さん、佐藤さんに助けられながらなんとかやってくることができましたこと、まずはお礼を申し述べたいと存じます。現在、学会の会員数は約1300名で、同規模の国内の他学会と、その活動内容や会費収入を比べてみると、放射光学会が年に一度開催される年会・合同シンポジウムの会計状態で、学会本体の財務状況が大きな影響を受けていることがわかります。私の任期の2年間の年会・合同シンポジウムは、それぞれ、広島大学、立命館大学で開催されました。両大学を中心とした実行委員の皆様のご尽力により、この間学会の予算も赤字を出すことなく、剰余金を次期の執行部に引き継ぐことができそうです。これら関係の皆様にもお礼を申し上げます。

昨年、特別賛助会員へのお誘い、「放射光ビームライン

光学技術入門～はじめて放射光を使う利用者のために」の宣伝をこの場でさせていただきましたが、引き続き以下委員の皆様のご協力をお願いしたいと存じます。

幹事の任期の終わりになりましたが、大きな懸案も残っています。これまで、学会の創立の時から事務局として協力していただいたワーズが、数年後に会社をたたまれる予定であるということを知り、現在次の事務局を選定、依頼する作業を進めています。学会の事業が滞りなく進めることができるように、現在の足立庶務幹事、新執行部などとも協力しながら作業を進めていきたいと思います。任期終了後も、この引継ぎに関する作業が少し残るものだと思いますが、この機会にこれまでの慣例に従っていたシステムの見直しも次期執行部をお願いしないといけない案件もあるかと思っています。力不足でいろいろな宿題が残ったままのところもあるかと思いますが、ご容赦いただけますよう、また、今後も微力ながらいろいろな場面で協力させていただければと存じます。

いろいろとありがとうございました。